

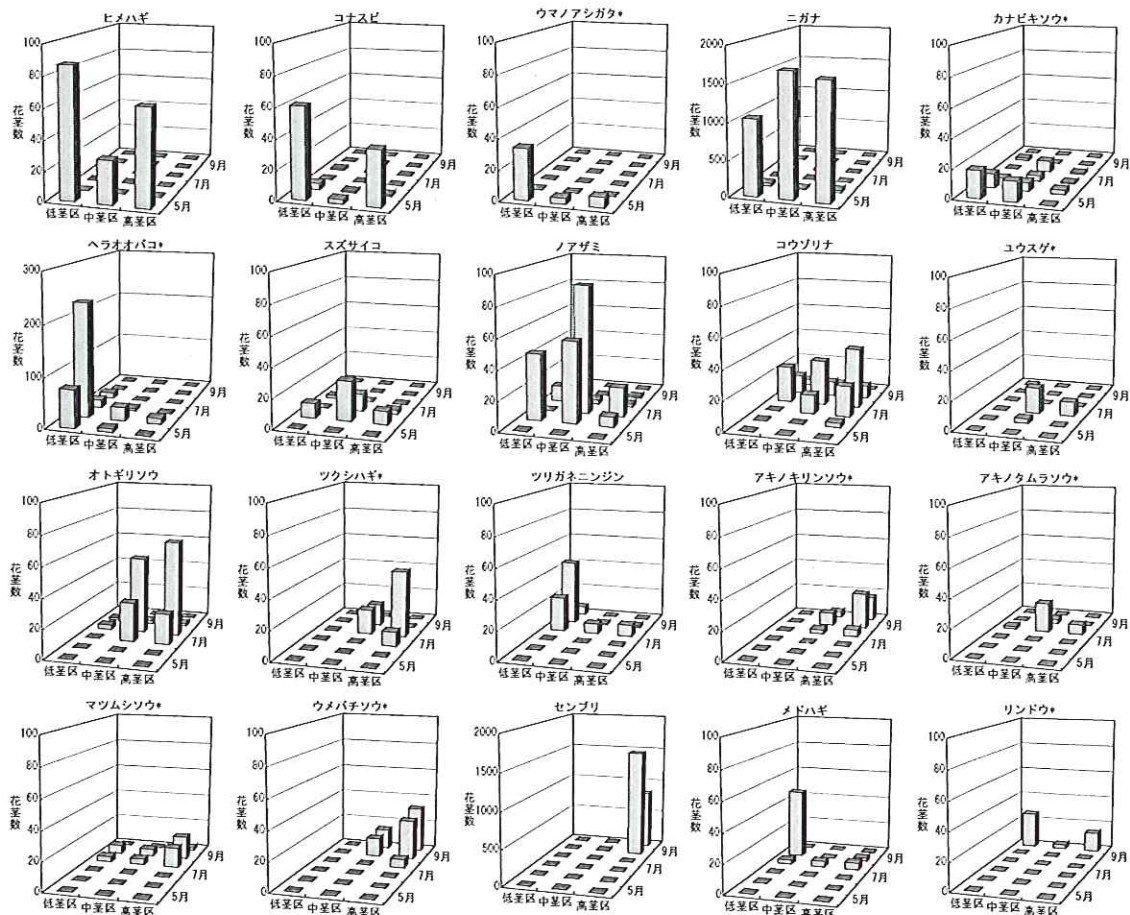
草刈り頻度の違いは草原性植物の開花状況に影響を与えているか？

島根県立三瓶自然館 井上 雅仁

島根県立三瓶自然館では、屋内の展示物だけでなく、屋外の自然物も展示物として位置づけ、普及啓発に努めている。その一環として、館に隣接する北の原と呼ばれる草原を管理し、来館者が草原性の野生生物に接する場を提供している。中でも草原に咲く草花は来館者の印象に残りやすく、解説の対象としやすいことから、重要な野外展示物と位置づけられる。そこで、将来的に野外展示物としての草原性植物の管理手法を確立していくことを目指して、刈り取り頻度の異なる場所において、開花状況の違いについて調査を行った。年あたりの刈り取り回数の違いにより草丈が異なる場所3箇所に、20m×20mの調査区をひとつずつ設けた。草丈の低い方から、低茎区、中茎区、高茎区と呼ぶ。2004年の5月から10月まで月1回、花またはつぼみをつけている花茎数をカウントした。あわせて各調査区の植生高、植被率、種組成について、各調査区に設置したサブプロットで記録をとった。

10月の平均植生高は低茎区で0.2m、中茎区で0.5m、高茎区で1.0m、シバ、トダシバ、ススキといった草原の代表的構成種が、刈り取り頻度の異なる箇所で優占度を変えながら存在していた。ヒメハギ、コナスビ、ニガナなど春季を代表する草花の開花茎数は、調査区間での差は少ないか、あるいは低茎区でより多くの茎数が確認された。ツリガネニンジン、メドハギ、オトギリソウ、アキノタムラソウ、センブリなどの秋咲き草花は、前2者は低茎区で茎数が多いものの、これらを除く多くの種類で中茎区や高茎区の開花が中心であった。

草原性植物の開花という視点では低茎区が他区を下回る傾向にあったが、人々の散策といった視点では草丈の低い箇所が適しているであろう。なお、立地条件や飛来種子量の違いから、調査区により個体数が異なっていることが想定されるため、本手順のみでは花茎数の違いが個体数の差によるのか刈り取りの影響によるものか、明確にできていない問題点が残っている。今後も引き続き基礎的な資料の蓄積を進めながら、利用者のニーズ、稀少植物の動態などとあわせて、管理手法の検討を進めていくことが重要と考えられる。



各調査区における草原性植物の月別開花状況 (20m×20mあたり)

*印の種は各調査区より10個ずつ得られた植生調査資料の中で、出現回数が2回以下の種